

# それぞれの「働きたい」を 支援します

## まずは相談から

ハローワーク（公共職業安定所）は、職業紹介事業を行う国が所管する機関。ここには、障がいのある人のための相談窓口が設置してあります。

「まず就労の相談を受けるときには、どんな仕事をしたいか、どれくらい働けるか（1日に何時間、週に何日）という、希望を話してもらっています。」



広島労働局 ハローワーク廿日市  
求人・専門相談部門 濱元 真由美 さん

また障がいのこと、働く上で心配なこと（例えば病院への通院）も話してもらいます。それはまず相談を受ける私たちが障がいの特性を理解し、その人が長く働ける職を探していくためです。障がいの度合いが同じでも職業への適性は人それぞれです」とハローワーク廿日市の濱元真由美さん。濱元さんは窓口での相談のほか、企業面接への同行や就職後の定着支援も担当しています。

ハローワークでは、必要に応じて、就職準備や適性を判断するため、広島障害者職業センター（広島市東区）や、就職につながる知識や技術を習得するため、広島障害者職業能力開発校（広島市南区）と連携を取りながら支援を行っています。

また、希望する仕事によっては、求人募集をしていない企業にも連絡を取りながら、仕事探しを進めることもあるそうです。

地域での就職の相談窓口、ハローワーク。就労を目指す人と企業とのつなぎ役になり、さまざまな支援を行います。

障がいのある人の「働きたい」を支援するため、まずは相談者のことを理解することから始まります。ハローワークの役割と就職状況を聞きました。

## 県内の就職状況

平成27年6月1日現在の広島県内の民間企業雇用障がい者数は、9073・5人、実雇用率は1・95%と過去最高を更新。

「障がいのある人の就職件数、求職者数は共に増加傾向にあります。法改正で障がいのある人の雇用率引き上げや景気が向上していることも背景にありますが、実際に『働きたい』という就労意欲のある人が増えて

きていることが、この結果には反映されています。」

「相談をされる人には、まず生活基盤を整える必要がある人や、福祉施設などでの訓練や生産活動から段階を経て、企業への就職を目指す人がいます。相談者へ、より良い支援を行うためにも、今後も関係機関と連携を深め、就労を目指す人と企業とのつなぎ役になりたいと思います」と笑顔で話してくれました。

（廿日市公共職業安定所）  
広島労働局  
ハローワーク廿日市



住 廿日市市串戸4-9-32  
問合せ ☎08609 FAX03350  
受付時間 8:30~17:15（土日祝日・年末年始休み）  
管轄区域 廿日市市、広島市佐伯区のうち湯来町、杉並台

障がいのある人の相談のため「手話協力員」、「精神障害者雇用トータルサポーター」、「就職支援ナビゲーター」といった専門員もいます。詳しくは問い合わせてください。

# まずは自らが動き、 会話していくことが大切

障がいのあるなしに関係なく、自立した生活には、就労はとても重要なこと。しかし、障がいのある人の就労やその後の定着にはまだ課題が残されています。

広島頸髄損傷LifeNetの徳政宏一さん（48）は、36歳のとき、高速道路での事故から車いす生活、その後リハビリを経ての就職。自身の経験から、事業主と就業者がどうしたらより良い関係を築けるかを伺いました。



特定非営利活動法人  
広島頸髄損傷LifeNet  
理事長 徳政 宏一 さん（48歳・地御前）

## できること・できないこと

12年前、36歳のときに自動車事故で頸髄損傷を負った徳政宏一さん。現在は自身の経験を踏まえ、生きること、障がいがあるということ、自立や就労に関して事業所や学校などで年間約40本以上の講演を続けています。

「私は事故後、リハビリを経て、ハローワークの求人からカルビー(株)広島工場に入社し、広島頸髄損傷LifeNetを立ち上げるまでの7年間、経理事務を勤めました」と徳政さん。

徳政さんは、障がいのある人が就労するとき、「理解を得ること」が一つの壁になるといいます。

「事業主は仕事に対してその人の力の100%、あるいはそれ以上を発揮することを期待します。しかし、私たち障がい者にはできること、できないことがあります。その理解を得ることがまずは必要なのです。」

## 自らが動く

障がいのある人の就労には、段差や手すりといった設備などの物理的なことだけでなく、排せつにかかる時間や身体ケアなど障がいそのものへの認識が課題にあがってきます。

「しかし、事業主や周囲に環境の改善を要望するだけでは状況は変わりません。厳しい言い方になるかもしれませんが、社会に出て働く以上、まずは障がいのある人自らが動き、コミュニケーションを取っていくことが大切です。」

## 働く目的と経験

「私と同じように車いす生活を送る後輩がいます。彼は、腕を動かすことができませんが、企業に就職し在宅で仕事をしています。彼は19歳のときから車いす生活になりました。しかし社会に出て、両親を喜ばせたいという思いから、面接を経て現在の職を得ることができました。障がいのある人にとって、就労はまだ厳しい状況にあります。しかし、私にとってカルビーでの7年間は周囲のサポートもあり、とても充実したものでした。それは、会社の同僚や上司の理解を得られ、私自身が日々挑戦を重ねることができたからです。ほかの人たちにもそういった経験をしてほしいと思います」と話してくれました。